聖カタリナ大学研究紀要
第 32 号　001～017　2020

人口減少地域における若者の移動と地元定着
――地方で医療専門職をめざす若者たち――

A sociological study on the social movement and local settlement of young people in a depopulated area: Young people aiming to become medical professionals in a local community.

田 村　周 一

要旨

本論文は、少子高齢化・人口減少がすすむ日本の地方社会において、医療専門職をめざす若者たちの意識をとおして、その移動および定住への志向を明らかにすることを目的とする。これは地方社会の形成および変容について、狭域・広域に及ぶ人的移動や地域交渉にもとづく関係網の視点からアプローチする試みのひとつである。地域社会における医療福祉の現状と課題というのは、その土地の特性（社会の存立基盤や基層構造、またその背景をなす歴史・文化）と関連づけて捉えなければならないという問題関心に立脚している。

ここで兵庫県但馬地方にある看護専門学校でのインタビュー調査をとおして明らかになったのは、おもに以下の点である。まず看護専門学校には、大学等への進学あるいは就職を経験したのちにあらためて専門学校に入学してきた、20 歳代後半から 30 歳代なかばの学生が一定の割合でいて、近年は学生の多様化傾向が強まっている。また学生たちの移動を分類すると、大きく 3 つのタイプに大別された（「Ⅰ　地方内での移動・周流型」「Ⅱ　地方外からの環流型」「Ⅲ　地方内／外の往還（往来）型」）。そして、とりわけ移動を経験した若者たちは、明確な目的意識と地元定着志向をもっているケースが多く、今後の地域医療の一端を担う存在とみなすことができる。こうした若者の多様な移動経路をはじめとする地域内外に及ぶ人的移動という観点は、地域医療はもとより、地方社会の現状・課題を考えていく上で重要なインプリケーションをもたらしうる。

キーワード：地方社会、若者の移動・定住、医療専門職養成

1　はじめに

本論文の目的と課題は、兵庫県北部但馬地方において継続して実施してきた現地調査の成果にもとづき、とりわけ看護専門学校で看護師をめざす若者を中心事例にして、地域医療における人材養成・確保の課題をふまえつつ、地方の若者の移動（定着定住、他出、U ターン）の様相を明らかにすることである。

少子高齢化・人口減少が甚だしい日本の地方社会において、地域医療の存続・維持は、最重要かつ喫緊の課題のひとつである。医療福祉は、人びとの生命・健康、そして生活の質に直結するものであり、社会生活にあたえる影響も大きい。そうしたなか、高齢化・過疎がすすむ地方では、医療再編（病院統合、機能分化）も進みつつある。いまの地域医療問題の要因のひとつは医師不足にあるとも言われている。とりわけ地方の公立病院の多くは、いかにして医療専門職者を惹きつけ、そして定着してもらうことに苦慮しており、継続的・安定的な医療従事者確保の体制づくりは地域医療の課題である。

地域医療に関しては、社会医学等の分野では数多くの研究・実践の蓄積がなされてきているが、社会学（村落研究・農山村研究）の領域においては、まとまった研究は、いくつかの例外をのぞいて（池上 2013；新沼 2013）、あまりされてこなかったように思われる。とりわけ地域内外に及ぶ人的移動という観点から、地域社会の存続と医療確保とを関連づける研究はほぼ見あたらない。そもそも、これまでの地方研究では、産業構造、生業・稼業、家族、集落自治などが中心的なテーマとされがちで、医療福祉問題についていまだ十分な研究蓄積がないのが現状である。今後は、地方社会の存立基盤・基層構造から地域医療福祉の現状を捉えようとする視点、また同時に今日の地域医療が地方社会の生活を根底で支えるプロセスに光を当てる試みが重要になると思われる。

以上のような問題関心にもとづき、本研究は、その全体的な目的として、日本の地方社会について、定住者やコミュニティ組織といった「定点」と、それにくわえて、狭域・広域に及ぶ人的移動や地域交渉による各種の「ネットワーク」に支えられたプロセスを明らかにすることをめざすものである。その一環として、本論文では、地方に暮らす若者に着目して、とりわけ医療専門職（看護師）をめざして地域の看護専門学校に通う学生たちを対象に、彼ら／彼女らが地方の生活にどのような意識をもち、過去から将来にかけてどのような移動を経験するのか、その一端を描き出すことを試みる。具体的には、兵庫県但馬地方の公立病院に併設された看護専門学校の学生 13 名を対象に実施したインタビュー調査にもとづき、その移動と生活意識につ

いて検討する。

構成は以下のとおりである。つぎの第 2 節では、調査対象地である兵庫県但馬地方の概要をまとめるとともに、但馬地方の地域医療の現況と課題について概観する。つづく第 3 節では但馬地方の看護専門学校の学生への聞き取り調査についてまとめる。とくに専門学校入学までの経路にもとづき 2 つのグループに大別して、それらを対比しながら、若者たちの実像にアプローチする。第 4 節では若者の移動を 3 つのタイプに分類することで、今日の地方に暮らす多様な若者たちを整理し、また看護専門学校の地域社会での位置づけについて検討をくわえる。

2　但馬地方における地域医療

2.1　兵庫県但馬地方の概要

まず本節では、調査地である兵庫県の但馬地方、および中心事例である養父市について概要をまとめる。

ここでいう「但馬地方」とは、兵庫県北部の地方圏域を指し、具体的には豊岡市・香美町・新温泉町（以上 3 市町を「北但馬」という）、および養父市・朝来市（以上 2 市を「南但馬」という）の 3 市 2 町から構成される。全国的には、柳行李を発祥とする鞄製造、城崎温泉、コウノトリの野生復帰、但馬牛などで有名である。全体の人口は 2015 年の時点で約 17 万人（世帯数約 62,000 世帯）である。但馬全体としては、国内の多くの地方部と同様、人口減少傾向にある。各構成市町それぞれの人口増減率をみると、人口が最も多く、圏内の中心地で行政機能の集約もすすむ豊岡市の人口減少率がやや低く、その他の市町の人口減少が高くなっている。豊岡市のような圏内中心エリアへの人口の集中により、そのぶん豊岡市以外の人口減少は大きくなるものの、但馬圏外への人口流出がいくぶん抑制されているといった圏内移動の様子をうかがうことができる。高齢化率は 33.6%と高く、兵庫県平均（27.1%）とくらべても高齢化の進行が顕著な地域である（表 1）。

表 1　但馬地方の概要（2015 年）

	人口（人）	人口増減率 ※2010 年比	高齢化率	世帯数	面積（km2）	人口密度（人/km2）
但馬全体	170,232	-5.7%	33.6%	61,921	2.133.3	79.8
豊岡市	85,250	-3.9%	31.7%	30,189	697.6	117.9
養父市	24.288	-8.4%	36.2%	8,713	422.9	57.4
朝来市	30,805	-6.1%	33.3%	11,500	403.0	76.4
香美町	18,070	-8.3%	36.7%	6,228	368.8	49.0
新温泉町	14,819	-7.4%	36.9%	5,291	241.0	61.5

（出所）平成 27 年度国勢調査をもとに筆者作成。

但馬の地域的な特色として、その多中核的な構造が指摘される。ひとくちに「但馬」と言っても、その範囲・中心はひとつではなく、歴史的に変遷しており、状況に応じて使い分けがなされる。面積的にも広大で、但馬地方で兵庫県全体の 1/4 を占めていること、また歴史的に多様な地域区分が併用されてきたことが多分に影響している。平成の市町村合併にともない北但馬の豊岡市の行政機能が強まっているものの、その北但馬の範域内においても、藩政期の小藩の流れをくむ日高、出石、村岡などはそれぞれに地域の中心をなしており、また南但馬の養父市の八鹿や朝来市の和田山なども、ひとつの地域区分として地域的文化的な独立性を保っている。周辺地域との関係性についても、南に隣接する播州地方（姫路市）、あるいは神戸や大阪といった阪神地域の各都市との結びつきはもとより、東に隣接する京都府北部の丹後地方（京丹後市や福知山市）、他方で西は鳥取県東部の因幡地方（鳥取市）との往来・交流も多く、周辺のさまざまな地域との節点を有している。このような多中核的な構造、およびそれにもとづく地域内外にわたる多様な関係網が但馬の存立基盤となっている（福田 2013）。

地域医療の観点からみた場合、「但馬」という括りは、兵庫県内にある 10 の医療圏（神戸、阪神南、阪神北、東播磨、北播磨、中播磨、西播磨、但馬、丹波、淡路）のひとつでもあり、但馬医療圏の構成市町も豊岡市・香美町・新温泉町・養父市・朝来市の 3 市 2 町である。但馬医療圏については、エリアがきわめて広大であり、医療提供・医療アクセスは以前より大きな課題であった [1)]。そうしたなか、病院機能の分化および重点化・集約化を図る医療再編が進められ、医療資源の有効活用にむけた取り組みが実施されている。具体的には、圏内の公立 9 病院を急性期医療と慢性期医療とで機能分化させ、中核を担う公立豊岡病院に医師を集約して人員を確保するというものである。関連して、2010 年 4 月に公立豊岡病院にドクターヘリが導入され、とりわけ注目を集めた。

つぎに養父市の概要をみる。養父市は、但馬地方のほぼ中央に位置し、2004（平成 16）年に養父郡の八鹿町・養父町・大屋町・関宮町の 4 町が合併して成立した。市域の大部分を山林が占め（山林面積 35,594ha は県内 4 位、市総面積の約 84%）、そのほとんどが中山間地域である。2015 年の段階で人口は 24,288 人、世帯数 8,713 世帯である。2010 年から 2015 年にかけての人口減少率が 8.4%と但馬地方で最も高く、これは兵庫県 41 市町のなかでも 3 番目に減少率が高い。また高齢化率も 36.2%ときわめて高く、高齢化がすすむ地域である。

市の中心地は市役所のある八鹿で、朝来市和田山と並んで南但馬の中心である。市の東部を流れる円山川沿いのエリアを中心に交通の要衝として栄え、明治以降は紡績工場などの進出により経済的に発展した。近年は市西部のハチ高原を中心に、ウィンタースポーツの観光拠点になっている。国道 9 号線が市内を東西に走り、西は鳥取方面、東は京都の福知山とつながっている。2012 年 11 月、北近畿豊岡自動車道の養父 IC および八鹿氷ノ山 IC が完成して、車で京阪神に出かけることも以前より容易になった（大阪まで車でおよそ 2 時間）。但馬内での交通移動は比較的に

便利で、車であれば、朝来市和田山へは 20 分、豊岡市街地およびコウノトリ但馬空港までは 30 分で行くことができる。

養父市には、前出の公立豊岡病院とならんで、但馬医療圏のもうひとつの中核病院である公立八鹿病院（420 床）があり、地域医療の中心的な役割・機能を有している。この公立八鹿病院に併設されている公立八鹿病院看護専門学校が本論の中心事例である。但馬内にある大学等および専修学校は、私立の短期大学が豊岡市内に 1 校、専修学校が 3 校（公立 1 校、私立 2 校）と多くない。同校は但馬で数少ない（公立では唯一の）高等教育機関であり、いわば地域の若手人材養成、そして医療確保の重要な役割を担っている。但馬のような人口減少地域において、地域医療をいかに維持・提供するかは避けられない課題である。次節では但馬の地域医療の歴史的な流れを概観しつつ、直面する医療確保の問題を確認する。

2.2　但馬地方の医療の現況および課題

但馬地方の地域医療の現況を確認するため、その歴史および現状について、地域医療における根本的課題のひとつである医師専門職不足の問題を中心にみていくことにする。

但馬の地域医療の歴史は古い。現在、但馬医療圏の中心的な役割を果たしている公立豊岡病院（518 床）は、1871（明治 4）年の豊岡県医局開設（この前駆となったのが久美浜県医局とされる）にまでさかのぼることができ、自治体病院としては、市立札幌病院（1869 年開設）に次いで全国 2 番目に長い歴史がある。ただし、その歴史はけっして平坦なものではなく、但馬内の各市町村がいかに医療確保という難題に取り組んできたかの歴史であった。1947（昭和 22）年に、豊岡病院は、城崎郡豊岡町をはじめとする 18 町村による町村組合立となり、1973（昭和 48）に 1 市 9 町を構成市町とした病院組合立となった。こうした病院経営の歴史も、全国的な医師不足および僻地医療過疎に直面するなかで、地域診療を可能なかぎり充実させ、地域医療を維持しようとする強い意思に根ざしたものであったと言えるだろう（公立豊岡病院史編集委員会 1994）。

養父市がある南但馬の地域医療の中心は、現在の公立八鹿病院である。八鹿病院の歴史をふりかえると、その前身は日本医療団八鹿病院で、1946（昭和 21）年に開設されている。これは八鹿町隔離病舎の一部が転用されたものであった。1949 年に日本医療団の解散にともない、八鹿町国民健康保険直営の公立八鹿病院となり、1951 年に八鹿町外 17 ケ町村養美伝染病院組合が結成され、1957 年には国民健康保険八鹿病院組合が組織されるに至る（構成町は八鹿町・養父町・大屋町・関宮町・村岡町・和田山町の 6 町）。このとき病院組合立にしたのには、1 つの町村の経営では診療所あつかいとなって、総合病院の名称が許されず、厚生省からの補助金も限られていたという事情があり、病院の拡充・発展が期待できないという判断があったからとも言われる（公立豊岡病院史編集委員会 1994）。1959 年に和田山町が病院組合から脱退して、5 町による経営となり、現在までつづく構成市町になる。上述のとおり、八鹿町・養父町・大屋町・関宮町は合併し

て養父市となり、村岡町は香美町村岡区となったため、現在の公立八鹿病院組合の構成市町は、養父市と香美町（村岡区と小代区）の 1 市 1 町となる（公立八鹿病院創立 50 周年記念誌編集委員会 1999)。

公立八鹿病院を中心とする南但馬の地域医療の実践については、谷尚の『「僻地」こそ医療の原点』（谷 2005）に詳しい。谷は 1960 年代の終わりから 30 年以上の長きにわたって八鹿病院の病院長（2001 年より名誉院長）を勤めた人物である。以下では、同書を参照しながら、今日までつづく但馬地方の地域医療の課題を確認したい。

どこの地方にも共通することであろうが、地域医療において「医師不足」は積年の課題であり、南但馬においても医療確保には頭を悩ませてきた。谷の述懐によれば、「昭和四〇年代から五〇年代は、日本経済の高度成長がようやく八鹿などの地方にも到達し、医療制度も大きな変革の時代を迎えていた。しかしまだ僻地医療、地域医療といった言葉はなく、田舎に赴任してくれる医師はおらず、人々はみな都会へ都会へと流れ、看護師や技師などの人材にも事欠いた」（谷 2005: 4）状況であった。当時は都市部の大学病院からの医師の派遣が一般的に行われており、それによってどうにか医師を確保していた。1960 年代半ばに大学紛争が起こると、医師の配置転換や大学への引き揚げがなされ、但馬のような条件不利地ではますます医師不足に陥ることになった。

高度経済成長期の農村から都市への人的移動（向都離村）は全国に共通する傾向であった。こうした全国的な人口移動の波は、地域外からの医師招聘にかぎらず、そのほかの医療専門職確保にも大きな影響を及ぼした。「高度成長期、地方の人々は都会へと出ていった。都会には学校があり、就職先があり、豊かな生活があった。看護師になりたい女性たちは都会の看護学校に行き、そのまま都会の病院に勤めた」（谷 2005: 20)。そうした医療人材不足の時期がつづくなかで、看護師を自前で養成するため、1992（平成 4）年に看護学校（3 年制、入学定員 30）が設置されることとなる。「八鹿病院は地域にしては病院の規模が大きい。若者の人口があまり多くない地方で、三〇〇床以上の病院を支えるだけの看護師を確保しようと思ったら、病院に看護学校を併設して養成し、地元に残ってもらうしか方法がない。……現在、少なくとも卒業生の三分の一、多い年には半分近くが病院に残る」（谷 2005: 46)。以上のとおり、医療専門職の養成・確保は地域医療の最重要課題でありつづけてきたわけだが、これは人の移動と直結する問題でもあるのである。

3　但馬地方で看護師をめざす若者たち

前節でみたとおり、人口減少および高齢化が急速に進行する地域社会においては、医療人材の確保が喫緊の課題となる。地域の立場からすれば、若者には地元に残って定着してもらいたいと

いうのが、率直な願いであろう。では、いまの若者たちは、但馬で暮らしていくことをどのように考えているのだろうか。本節では、筆者がこれまで実施してきた現地調査にもとづき、地域で医療専門職をめざす若者たちの生活世界・意識について、進学・就職における地域移動、および専門職として地元に定着することを中心にみていくことにする。

3.1　看護専門学校調査の概要

筆者は、2010 年より但馬地方での現地調査を断続的に実施してきたが、そのなかで但馬地方の看護専門学校の学生を対象にしたアンケート調査、およびインタビュー調査を実施することができた（2013 年 6 月～2014 年 3 月）。ここでは、そこで得られたデータから、但馬地方で医療専門職をめざす若者の移動、但馬での生活、将来への意識の一端を描出してみたい。

調査対象の公立八鹿病院看護専門学校は、養父市内の公立八鹿病院に併設された 3 年制の看護専門学校である（1 学年の定員は 30 名）。調査時の在籍学生数は 90 名（男 14、女 76）であった。9 割以上（83 名）が兵庫県内の生まれであり、3 分の 2（60 名）が地元の但馬地方にある高校を卒業していた。県外学生の出身地をみると、大阪府、京都府、そして中四国と九州である。1990 年代には、関西圏をはじめ、中四国や九州の各県からの入学者も一定数いたが、その頃と比較すると、但馬外あるいは県外からの入学者は漸減傾向にある [2)]。ただし「居所および通学の状況」をみると、「実家からの通学」は約 4 割（37 名）でさほど多くなく、もっとも多いのが「学校の寮」の 42 名である。それ以外は、「アパート等でひとり暮らし」「きょうだい・親族と同居」「知人と同居」である。前述のとおり但馬は面積が広大であるため、但馬出身者であっても、実家から通学できないことも少なくない。但馬の人口減少の主因としては、そのほかの地方社会と同様、若者の地域外への流出が第 1 に考えられるが、但馬地方内での移動（旧町村・山間部から町場へ、あるいは町場から他の町場へ）もめずらしくない。

平均年齢は 22.4 歳といくぶん高めである。というのも、「25～29 歳」が 13 名、くわえて「30 歳以上」が 11 名ほど在籍しており（最年長は 46 歳）、多様な年齢構成となっているのが目を引く点である。高校新卒／既卒の別で分けると、高校新卒が 57 名にたいして、既卒が 33 名と、大学等への進学や就職などを経ている者が 3 分の 1 以上を占める。看護専門学校に入学する前の最終学歴は、「4 年制大学・大学院」が 10 名、「短大」が 4 名、「専門学校」が 6 名で、「高卒」は 70 名である。また「社会人としての就労経験」については、「あり」が 25 名、「なし」が 63 名であった（「回答なし」が 2）。

これらのことから言えるのは、学生の属性として、第 1 に地元出身者（但馬、あるいは兵庫県内）の比率が以前と比べて増えつつあり、中四国や九州といった他県からの学生は減りつつある傾向にある。そして第 2 に、他方で入学してくる学生の年齢や学歴は幅広くなってきており、入学までの経歴・経緯は多様化している点が挙げられる。こうした多様化は、以下で詳しくみてい

くが、進学や就職などでいったん但馬外に出て、のちに帰郷してきた若者の受け入れ口としての側面が強まっていることを示しているように思われる。だとすれば、人口減少のすすむ過疎地域において、若手人材を地元に引き留め、そのまま養成・確保するという学校設置の所期目的にくわえ、いちど他出した若者を但馬に呼び戻す経路・契機として、新たな側面・役割を強めつつあると言えるだろう。それでは、こうした入学生の経歴の多様化に着目しながら、学生へのインタビューの内容を詳しくみていこう。

3.2　インタビュー調査にみる経路の多様性

学生へのインタビューは、事前に実施したアンケート調査の際に協力依頼をし、応諾してくれた 13 名（男性 3、女性 10）にたいして、半構造化面接のかたちで実施した（実施時期は 2014 年 3 月 4 日～7 日）。それぞれ約 30 分～1 時間程度、場所は学校の一室をお借りして、ひとりずつ個別におこなった[3)]。インタビュー対象者のリストおよび概要は、表 2 のとおりである。

インタビューの最初に、看護専門学校に入学するまでの経路・経歴について確認をして、高校を卒業したのちにそのまま進学してきたのか、あるいは大学等への進学あるいは就職を経験したのちにあらためて専門学校に入学してきたかによって、2 つのグループに大別した。ここでは仮に前者を「高卒後直接進学組」とし、後者を「大学等進学・就職経由組」と区別しよう。結果、高卒後直接進学組が 5 名（表 2 のケース番号 1、5、6、9、12）で、他方の大学等・就職経由組は 8 名（表 2 のケース番号 2、3、4、7、8、10、11、13）であった。

おもな調査項目は、①看護師を志した動機・理由、②家族（親・きょうだい）・友人関係、③地域（出身地域、および但馬での生活に関する評価）、④将来の展望で、とくに大学等進学・就職経由組にたいしては、⑤学歴・職歴、⑥入学までの経緯・経路についても聞き取りをした。

3.2.1　高校卒業してすぐに看護専門学校に進学した場合

それでは、まずは高卒後直接進学組の 5 名についてみてみよう（ケース番号：1、5、6、9、12）。5 名のうち 4 名が但馬内の出身で、いずれも但馬内の高校を卒業している。あとの 1 名は兵庫県内の他市からの入学である。5 名とも高校卒業まで実家を離れたことはない。看護専門学校への志望動機（看護師をめざすきっかけ）については、自分自身や親族の受療・入院経験から、看護師の仕事にふれ、憧れるようになったというケースが複数みられた。たとえば、つぎのようなケースである。

> 命にかかわる職業に就きたくて、でも何なりたいかっていうのは高 3 の夏くらいまで全然決めてなくて……。このまま何もないんやったら、就職しようかなと思ってたんですけど。おじいちゃんが入院して、看護師さんにお世話になって、その時の看護師さんがすっごい良くしてくださって。そこからもう急に進路変更して、看護学校に入りました。（E さん　19 歳・女性）

表 2　インタビュー対象者の概要

ケース番号	仮名（年齢、性別、学年）	進学・就職による移動歴の有無	出身、移動歴の概要	卒業後の予定
1	A（19 歳、女性、1 年）	無	南但馬出身。	未定（関西圏内の都市部に出てみたい思いはある）
2	B（30 歳、女性、1 年）	有	南但馬出身。高校卒業後、県外の短期大学に進学。短大卒業後、都市部（兵庫県内）で就職。	但馬の公立病院に就職予定
3	C（27 歳、女性、1 年）	有	南但馬出身。高校卒業後、都市部（大阪府内）で複数の仕事を経験。	但馬の公立病院に就職予定
4	D（25 歳、男性、1 年）	有	北但馬出身。高校卒業後、但馬の短期大学に進学。短大卒業後、但馬の福祉施設に就職。	但馬の福祉施設に就職予定
5	E（19 歳、女性、1 年）	無	南但馬出身。	未定（但馬の公立病院か、あるいは独身のうちに県内都市部に出てみたい思いもある）
6	F（19 歳、女性、1 年）	有	兵庫県内の出身。専門学校入学を機にはじめて但馬に来た。	未定（但馬では就職しない。関西圏内を考えている）
7	G（33 歳、女性、3 年）	有	兵庫県外の出身。大阪府内の大学に進み、結婚したのちも大阪で過ごした。	但馬の公立病院に就職予定
8	H（32 歳、女性、3 年）	有	南但馬出身。高校卒業後、県外の大学に進学。大学卒業後は但馬にもどり就職。	兵庫県内の公立病院に就職予定
9	I（21 歳、男性、3 年）	無	南但馬出身。	但馬の公立病院に就職予定（将来的には、県外に出てみたい思いもある）
10	J（30 歳、男性、3 年）	有	南但馬出身。高校卒業後、東京の専門学校に進学。専門学校卒業後は但馬にもどり就職。	但馬の公立病院に就職予定
11	K（22 歳、女性、2 年）	無	北但馬出身。高校卒業後、但馬の公立病院に看護助手として就職。	但馬の公立病院に就職予定
12	L（20 歳、女性、2 年）	無	北但馬出身。	未定（但馬から遠すぎない、県内中都市で就職したい）
13	M（28 歳、女性、2 年）	有	北但馬出身。高校卒業後、県外の大学に進学。大学卒業後、但馬にもどり就職。	但馬の公立病院に就職予定

高卒後直接進学組のＥさんは、南但馬出身で、ずっと実家で暮らしており、看護学校へも実家から通学している。関西圏内で都市部の看護学校に進学することも検討したが、最終的にいまの学校に決まった。将来どこに就職するかについては、まだ具体的なイメージはない。但馬の公立病院か、あるいは都会に出て、設備や研修制度の充実した規模の大きい病院に勤めてみたいという思いもある。

将来の展望（卒業後の予定）について質問してみると、高卒後直接進学組に共通してみられる特徴として、但馬への愛着を示しつつも、いちどは都会に出て生活してみたいという願望を抱いている様子がうかがえた。もう一方の大学等進学・就職経由組と対比すれば、大学等進学・就職経由組がきわめて明確な将来プランを練り、その多くが但馬内の病院への就職を予定・検討しているのに対して、高卒後直接進学組は多様なライフコースの可能性を探っている段階にあると言える。とはいえ、「一刻もはやく但馬を出ていってしまいたい」「地元を離れて、もどってくるつもりはない」といったような地元にたいする否定的発言、あるいは強烈な都会志向の考えは聞かれない。そこには都会での１人暮らしに不安を感じており、いずれ都会に出ることがあったとしても、地元や実家と適度な距離を保ちたいという心情が垣間見える。以下は、どちらも高卒後直接進学組で、これまでに一度も但馬を離れたことのない若者の言葉である。

〔卒業後は〕都会に出たいって感じなので、とりあえず。……神戸とか、大阪とか。別に関東とかへ行ってもいいと思ってるんですけど。最初は近いところに。なんかあったら帰れる所にと思って、神戸か大阪らへんか。（A さん　19 歳・女性）[4)]

〔都会に〕出たいなと思ってるんですけど。1 回だけでもみたいな。1 回私もせめて兵庫県内だけでも出たいなと。……なんかまだちょっと不安だなと思って。〔移動先の候補として兵庫県内の中都市の具体名を挙げて〕……福知山線があって、実家にも帰りやすいのでその沿線がいいっていうのはあったんですけど。（L さん　20 歳・女性）

3.2.2　大学等への進学、就職を経験したのち看護専門学校に入学した場合

つぎに大学等進学・就職経由組のほうに目を向けてみる。こちらは大学等への進学あるいは就職を経て、あらためて看護専門学校に入り直してきたグループである（ケース番号：2、3、4、7、8、10、11、13）。これに分類される 8 名のうち、7 名は但馬出身で、あとの 1 名は結婚にともなう転入（配偶者の実家が但馬）である。但馬出身者 7 名のうち 5 名が、大学等進学あるいは就職にともなう県外での都市生活を経験しており、あとの 2 名も豊岡市の市街エリアでの就学・就労を経験している。

なんらかのかたちで社会経験を経た場合、あらためて看護師をめざして、いまの学校に入学してきた理由・きっかけは、その来歴におうじて多様で、人それぞれである。出産・子育てのため

の帰郷、転職を機に安定した生活手段を得るため、または積年の夢であった、あるいは国際支援活動への関心というケースもあり、多岐にわたる。そのほか、高卒後直接進学組にも複数みられた、身内の病気・受療経験が医療従事者を志す転機になったというケースがこちらでもみられた。

高校卒業後に大阪にでてフリーターをしていたCさん（27歳・女性）は、出産を機に但馬にもどって生活することにした。彼女の場合、母親も看護師をしていたこともあったが、看護師が手堅い職業と考え、但馬で子育てしていくための手段を得るべく、専門学校に入学した。

> 出産をこっちでしようと思って。それで帰ってきて。その時まで結婚するかどうしようかも迷ってたような状態で、結局このまま一人で育てようと思ったので。母もシングルで私を育ててくれて、看護師なんですけど、やっぱり看護師がかたいでって〔母に〕言われて。……これからの自分のこと考えて、子供のこと考えたら、……じゃ、〔看護専門〕学校受けるわって。（Cさん　27歳・女性）

県外の福祉系大学に進学したHさん（32歳・女性）は、大学卒業後に但馬にもどって就職した。大学時代に経験した都会生活は心地よかったが、実家で暮らす父親の体調も心配だった。長らく福祉施設に勤めていたが、看護師になりたいという昔からの思いが蘇ってきて、あらためて看護学校に入り直した。卒業後は、経験を積むべく、兵庫県内ではあるが但馬外の公立病院に就職することに決めた。これでまたいったん但馬を離れることになる。

> Uターンで福祉系の施設に就職しまして。そこから7年間介護のほうに携わらしてもらって。……ほんとは幼い頃から看護師になりたいっていう思いがあったのですが、……〔就職してから〕5 年経ってたんですけど。あーやっぱ私、看護師になろうって思いました。……体が元気な限りは看護師としてやっぱり現役ずーっと勤めていってスキルアップしたいですね。（Hさん　32歳・女性）

大学等進学・就職経由組の場合、看護師を志すことにした具体的なきっかけや事情は、個々それぞれに多様である。ただし共通して言えるのは、看護師として働くということへの明確な目的意識である。そのことも影響してか、すべてのケースで、卒業後の就職先、ライフスタイル、将来の展望について、明瞭なイメージをもっていた。卒業後の仕事および生活について、8 名のうち7名が但馬内での就職を想定して（あるいは決めて）いた。これは学年に関係なくみられた傾向である。こうした地元定着志向について、たとえば但馬への愛郷意識によるものとしてのみ捉えることは早計であろう。無論、大学進学や就職といった社会経験をとおして、但馬という地域を相対視できるようになり、地元への愛着が高まったことによるということも考えられる。ただ

し実際のところは、すでに但馬での生活基盤が確立しているためであったり、あるいは奨学金返還免除の要件であったりと、それぞれの現実的な事情によるケースも少なくない。

いずれにせよ、はやく看護師としてのキャリアを開始させ、安定した収入を得たい、あるいは知識・技術をさらに高めたいという意識の高さは、大学等進学・就職経由組に共通する点であり、また可能な限り看護師として働き続けたいと思っている点もおおむね共通していた。ここで指摘したいのは、大学等進学・就職経由組の場合、将来にわたって但馬に定住して、地域医療に貢献する人材となりうる可能性が少なからずあるということである[5)]。

J さん（30 歳・男性）は、高校を卒業してあと東京の専門学校に入学したが、都会の水があわず、専門学校を卒業後は但馬にもどって地元企業に就職した。6 年間ほど勤めたが、妹が看護師をしていることもあって、看護師であれば長期的に安定して仕事ができると思い、手に職をつける意味でも看護師になることにした。卒業後は但馬内の公立病院に就職する。

（「10 年後には何をしていると思うか」という質問にたいして）10 年後、今は結婚してないんですけども、多分結婚してるかなっていうようなこともあって。でも自分が看護師としてそのとき 10 年後どうなっとるかなって考えるとまだなんかぱっとイメージできないというか。……10 年後、そうですね、40〔歳〕か。うーん。……いや、でも看護師は続けてるだろうなとは思いますけども。（J さん　30 歳・男性）

インタビューをした 13 名のうち、看護学校を卒業して就職する際、但馬を離れるという意思を明確にしているは 2 名だけであった。1 人は前出の H さん（キャリア形成のために但馬外の病院に就職を決めた）で、もう 1 人は看護専門学校に入学するために但馬外から八鹿にやってきたというケースである。そのほかに「未定」が 4 名ほどいたが、これはいずれも高卒後直接進学組で、すでに上でみたとおり、都市への転出も含め、将来の可能性を検討している段階だと言えるだろう。そうした場合であっても、いちどは都市部に出てみたいと思いながら、でもいずれは但馬にもどってきたいと考えているケースが複数みられた。最初に言及した E さんが、つぎのように述べていたのが印象的である。

（「もし都会に出たとして、いずれは但馬にもどろうと思ったりするか」という質問にたいして）それはめっちゃ思います。但馬に、いずれは帰ってきたいっていうのあるし……。結婚して子供とかができたら。自分が今まで学校生活がめっちゃ楽しかったんで、こっちで育てておんなじようにしてあげたいっていうのもあるんで。（E さん　19 歳・女性）

3.3　多様な若者を受け入れる地域人材養成拠点としての看護専門学校

以上、本節では、看護専門学校に入学してくるまでの経歴のちがいに着目しながら、人口減少の著しい地方に暮らし、医療専門職として働こうとしている若者たちの姿をみてきた。地方社会においては、若者の就業機会は限定されており、正社員として確固としたキャリアを形成し、安定した生活を営むのはいまや容易でない。それゆえ、地方圏においては、公務や郵政のほか、医療・介護・教育・保育といった公共的部門がもつ雇用創出機能の重要性が指摘されているところである（阿部2017）。そうした社会の状況下で、但馬地方において、地元に看護師養成の専門学校があること、そしてなにより医療という公共的な分野での仕事先があることの意味合いは大きい。

事例とした看護専門学校は、その開校以来、地方の若者の教育・キャリア形成に多大な貢献をなしてきており、また地域医療の観点からも、地元での医療専門職の養成・確保の使命を果たしてきた。近年では入学前の来歴に多様性がみられるようになり、年齢的にも幅広い若者たちを受け入れる地域拠点としての性格を帯びつつある。以上からうかがえるのは、これまで主流であった高校卒業後にそのまま専門学校に入学するという一元的な進路モデルとは異なる移動経路の多様な様相であり、こうした点に今後の地域社会を支える人材を見出すことができるのではないかと思われる。

4　地方社会にみる若者の移動と定住

最後に、あらためて若者たちの地域内外での移動の形態に着眼して、それらのタイプを整理するとともに、若者が移住あるいは定着するプロセスにおいて果たされる、地域の看護専門学校の役割・位置づけを指摘して、本稿のまとめとしたい。

今回のインタビュー調査でみた但馬地方の若者たちの移動は、大きく分けて、3 つのタイプ分類に整理できるように思われる（表 3）。

第 1 に、「Ⅰ　地方内での移動・周流型」で、基本的に但馬内での生活を志向し、地方内で周流（あるいは定着）するグループである。但馬のなかでも中心から比較的に離れた旧町村や中山間地域の出身者にみられたタイプで、豊岡、八鹿、和田山のような町場に進出して、安定した仕事を得ようとしているケースがこれにあたる。この場合、定期的に実家にもどって家族と過ごすなど、長期間にわたって継続して地元の人的ネットワーク（家族、友人たち）を築いていこうと考えている傾向がみられる。

第 2 は「Ⅱ　地方外からの環流型」である。これは、いちど都市部での生活を経験したあと、但馬にもどり、安定した生活の基盤を整えたいと考えているケースがあてはまる。看護師を志すに至った経緯・事情はさまざまだが、できるだけ仕事は続け、地域内で暮らしていきたいと考え

ている点では共通している。

表 3　聞き取り調査からみえる移動のタイプ分類

移動の類型	概要（移動の経路・範域）	該当する事例 （表 2 のケース番号）
Ⅰ　地方内での移動・周流型	但馬内での移動、あるいは周流をしながら、継続的な但馬での暮らしを志向する。	4，9，11
Ⅱ　地方外からの環流型	但馬外への移動（進学・就職）を経て、U ターンしてきた。今後は但馬に定着したいと考え、生活の安定化を図る。	3，10，13
Ⅲ　地方内／外の往還（往来）型	但馬内および外部への移動を視野に入れ、人生を切り拓こうと志向する。将来的には、機をみて但馬にもどろうとも考えている。	1，2，5，6，7，8，12

そして第 3 が「Ⅲ　地方内／外の往還（往来）型」である。これは、上の 2 つ（「地方内での移動・周流型」と「地方外からの環流型」）にあてはまらない第 3 のタイプである。ここには多様なケースが含まれるが、必要におうじて地域内外の境界を越えて移動しながら、生活の安定あるいはキャリアの向上を図っていこうとするパターンとひとまず言うことができるだろう。今回の調査で実際にみられたのは、都会に出てみたい思いを抱きつつ（それでも比較的に距離の遠くない関西圏が中心）、いずれは但馬にもどってくることも想定しているケース、そのほか U ターンしていったん但馬にもどったものの、結果、但馬外の病院に就職を決めたケースなどである。将来的には、いずれ但馬にもどって生活する可能性を十分に残している点も特徴的である。

若者の移動と定住を基礎づける要因として、「生計・経済的要因」、「暮らし・利便性要因」、「人間関係・社会関係要因」、「象徴的・歴史文化的要因」の 4 つが指摘されているが[6]、とりわけ生計・経済的要因は若者の選択に決定的な影響を及ぼす（山本・杉本 2015）。その点、看護師資格は社会的ニーズも大きく、若者たちにとっても、安定した収入や長期的な就業が期待しやすい。本論でみてきた看護専門学校について言えば、都市での自立した生活の機会をうかがう者がいる一方、他方で但馬での生活の安定化を図ろうとする者もおり、それらが年齢をこえて混在している。いわば、「移動」を視野に入れた者と「定住」を目指す者とが行き交う場所ととらえることができるだろう。

但馬地方全体で見れば、流出していく若者のほうが多い傾向であることに変わりはない[7]。しかしながら、人口減少にともなう地方社会の縮小（あるいは消滅）が危惧されるなかで、少数ながらも地方で暮らしていこうとする若者にとって、いわゆる地元の看護専門学校がもつ、移動と定住・定着とが混交する地域の結節点としての社会的側面は強調されてよい。また、いまの地方

社会の側にとっても、地域人材養成の拠点としての価値、そして若者を地域につなぎ、若者どうしの人的ネットワークを醸成する場としてのかえがたい価値を有していると言えるだろう。

［付記］

本稿は、JSPS 科研費 JP24530614（研究課題：「広狭域に及ぶ人的移動と地域交渉を介した地方社会の複合的形成に関する研究」（基盤研究(C)、研究代表者：福田恵））の助成を受けたものの研究成果の一部である。

［注］

1) 但馬地方の地域医療資源の概要は以下のとおりである（表 4)。

表 4　但馬地方の地域医療資源（2015 年 9 月）

	実数			人口 10 万人あたりの値				
	豊岡市	養父市	但馬圏域全体	豊岡市	養父市	但馬圏域全体	兵庫県	全国
病院	3	2	12	3.51	7.55	6.64	6.32	6.62
一般診療所	56	17	117	65.43	64.15	64.78	80.46	68.42
医師（常勤換算人数）	191.30	57.70	326.60	223.50	217.73	180.83	236.16	244.12
看護師（常勤換算人数）	670.10	433.20	1,480.50	782.90	1,634.66	819.74	760.56	840.13

（出所）「日本医師会　地域医療情報システム(http://jmap.jp/)」をもとに筆者作成。

2) 公立八鹿病院創立 50 周年記念誌編集委員会（1999)、学校提供資料、および学校関係者へのインタビューにもとづく。

3) インタビューの実施に際しては、対象者にたいして、研究目的・意義・方法・期間、インタビューは途中で中断・辞退することができ、その場合にも不利益を受けないこと、得られた情報は匿名で取り扱い、研究目的以外には使用しないことを、文書をもちいて説明し、同意を得た。

4) 反訳文中の〔　〕は筆者による補語である。

5) 看護師という仕事への意識、および但馬地方での生活意識について、在籍学生全体を対象にした事前のアンケート調査の回答をみると、「看護師として長年にわたり働き続けたい」とい

う意識は、学生全体におおむね共通するものである。「但馬地域に密着した看護師として働きたい」という点では、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と「あてはまらない」「どちらかといえばあてはまらない」とがほぼ拮抗している。また将来的な居住地については、「但馬地域にずっと住み続けたい」という意見は4割弱であり、いったんは但馬を出てみたいと考えている様子がうかがえるものの、それは大都市圏で生活したいということを必ずしも意味しない（表5）。

表5　看護師の仕事、および但馬での生活について（N=90）

	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない
看護師として長年にわたり働き続けたい	36 (40.0%)	40 (44.4%)	13 (14.4%)	1 (1.1%)
但馬地域に密着した看護師として働きたい	14 (15.6%)	28 (31.1%)	27 (30.0%)	21 (23.3%)
但馬地域にずっと住み続けたい	8 (8.9%)	27 (30.0%)	34 (37.8%)	21 (23.3%)
神戸や大阪のような都会に出て生活したい	11 (12.2%)	28 (31.1%)	37 (41.1%)	14 (15.6%)

6)　若者の移動に関する社会学的研究として、おもに人間関係・社会関係要因に着目した研究については一定の研究蓄積（李永・石黒 2008；石黒ほか 2012）がある。

7)　同校の卒業後就職先（2012年度）をみても、地域外（但馬外あるいは県外）で就職する者は少なくない。3分の1以上が但馬地方の中核病院に就職しているものの、他方で但馬外のエリア（兵庫県内の神戸、阪神、丹波、播磨）はそれ以上に多く、兵庫県外への就職も一定数いる。学校提供資料、および学校関係者へのインタビューにもとづく。

［文献］

阿部誠、2017、「若者が地方圏で働き暮らしてゆくために」石井まこと・宮本みち子・阿部誠編『地方に生きる若者たち――インタビューからみえてくる仕事･結婚･暮らしの未来』旬報社。

福田恵、2013、「日本社会における地方的世界――山間部と旧町場からみた「但馬」」藤井勝・高井康弘・小林和美編著『東アジアの「地方的世界」の社会学』晃洋書房。

池上甲一、2013、『農の福祉力――アグロ・メディコ・ポリスの挑戦』農山漁村文化協会。

石黒格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子、2012、『「東京」に出る若者たち――仕事・社会関係・地域間格差』ミネルヴァ書房。

吉川徹、2001、『学歴社会のローカル・トラック――地方からの大学進学』世界思想社。

公立豊岡病院史編集委員会、1994、『公立豊岡病院史』公立豊岡病院。

公立八鹿病院創立 50 周年記念誌編集委員会、1999、『公立八鹿病院創立五十周年記念誌』公立八鹿病院組合。

李永俊・石黒格、2008、『青森県で生きる若者たち』弘前大学出版会。

新沼星織、2013、「現代農山村家族の医療行動――山形県小国町における実態とその背景」『村落社会研究ジャーナル』39: 23-34。

谷尚、2005、『「僻地」こそ医療の原点』悠飛社。

若月俊一、2007、『若月俊一の遺言――農村医療の原点』家の光協会。

山本素世・杉本久未子、2015、「地方都市に住むという選択――若者から見た篠山の魅力」藤井和佐・杉本久未子編著『成熟地方都市の形成――丹波篠山にみる「地域力」』福村出版。